あの人に迫る

「釜石の奇跡」と呼ばれる。岩手県釜石市の小中学校では、学校管理下にいた子どもに東日本大震災の津波による犠牲者を一人も出さなかった。その釜石の学校で防災教育を手がけたのが、群馬大大学院工学研究科教授の片田敏孝さん（五一）だ。東海、東南海、南海地震の発生が心配される中、その手腕に注目が集まる。（中村禎一郎）

他人に命預けぬ 防災教育が必要

片田 敏孝 群馬大教授

写真・岡本沙樹

かただ・としたか　1960（昭和35）年岐阜県加子母村（現中津川市）生まれ。岐阜高専から豊橋技術科学大大学院修了。大工学部講師、2005年、工学部教授、10年広域首都圏防災研究センター長。専門は公共経済学。内閣府中央防災会議の専門調査会委員も務める。11年の日本災害情報学会の廣井賞を受賞した。

三重県尾鷲市や北海道根室市などでも防災教育を手がける。活動の場は南米ニカラグアにも。現地では「BOUSAI」という言葉がそのまま使われている。著書に「3・11釜石からの教訓　命を守る教育」（PHP研究所）「人が死なない防災」（集英社）など。

災害で住民に逃げてもらうためには。

なぜ人は逃げないのかばかりを追究してきた。昔、過疎問題を扱った経験が生きた。僕らから見ると、避難勧告が出ているのだから逃げて当然。でも、逃げなかった人たちに話を聞くと考えが変わった。

例えば、山間部で避難勧告が出るとする。一人暮らしのおばあちゃんは「逃げないよ」と言う。「何で逃げないの」と質問すると、おばあちゃんはこう答える。「この家は若いときにおじいちゃんと苦労して造った。おじいちゃんは死んだ。今一人暮らしをしているが、あんたに従って私が逃げたとしても、家は流れてしまう。でもその後の暮らしはどうなる。年金で暮らしている。今から家を造るわけにもいかん。家が流されるんだったら、じいちゃんが迎えにきたってこと。じいちゃんのところに行く」

逃げない行動も、おばあちゃんの立場に立てば合理的でしょ。逃げないのは、おばあちゃんの尺度から見るとベストな行動になっている。

僕らは僕らの感覚で「なぜ逃げない」「防災意識の低いやつだ」と指摘するが、逃げないのにはその人なりの理由があり、それぞれが合理的な行動を取っている。

避難してもらうためにはそういう意識ギャップを埋めていくことが大事だ。おばあちゃんをどう説得するか。「ばあちゃん、逃げないとだめじゃない」と説くのは僕らの尺度。「そうだよね、ばあちゃん」から入る。それはおばあちゃんの尺度から見ていることを意味する。

まず、相手の合理性を認めることで初めて接点ができる。「ばあちゃんは川に流されてもいいかもしれないけど、子どもは、ばあちゃんを一人暮らしにして申し訳ないと思っとる。もしばあちゃんが死んだら、時々お金も送ってくれる息子が一生悔やむことになるぞ」と伝える。

ばあちゃんの尺度を否定したわけじゃない。何を伝えたのか。それは息子の尺度。それにおばあちゃんが気付いたことで、「そうか、自分の行動が息子を一生苦しめるな。逃げるわ」と感じてくれる。

釜石で実際に実践した防災教育は。

はじめに一般市民相手に防災講演会をやった。でも来る人は最初から防災意識の高い人。そうじゃない人と意識ギャップが全然埋まらない。学校での防災教育を思いついたのはそんなときだ。

釜石のある学校に行ったとき、校庭で遊んでいる子どもに「ここは近いうちに津波が来るけど、知ってるか」と尋ね、やりとりが続いた。

「知ってる」「逃げるか」「逃げない」「なぜ」「うちはおじいちゃんも、お父さんも逃げない。釜石にはギネスブックに載っている世界一大きな湾口防波堤があるから。もう昔と違う」

僕は「まずいな」と思った。東北地方は繰り返し津波に襲われている。周期性からして、この子は人生の中で絶対に津波に遭遇する。加えて「『逃げないよ』と自信満々に言う子どもに誰がした」と怒りがこみ上げた。原因は間違いなく親、家庭、社会。絶対に正さなければと使命感を持った。

学校で防災教育を考えた理由はもうひとつある。子どもに十年間教えれば、十二歳の子どもは二十二歳になる。十年間で防災意識の高い釜石市民を育てられる。さらに十年やれば、最初の子が親になる。防災意識の高い親の元で次の世代が育つことになる。

釜石の学校で最初にやったのは意識ギャップを埋めるために、子どもたちにたった一問質問すること。

「君が一人でうちにいるときに大きな地震がありました。君ならどうしますか」

子どもたちの答えは「お母さんに電話する」「お母さんが帰ってくるのを待つ」。返答用紙は回収しないで自宅に持って帰らせた。その時にお母さん宛ての手紙をつけた。「回答を見てみてください。あなたのお子さんはこの次の津波で生き残ることができますか」

小中学生の親の世代は日々にきりきり舞い。防災講演なんか来ていられない。手紙を見ると目が開かれる。翌日は学校の電話が鳴りまくった。「学校の防災教育、どうなっているんですか」

子どもの命を守りましょうとアプローチをしたことで、僕と親たちがコミュニケーションを取るきっかけをつくった。しかし、防災教育が地域に十分広がらない八年目に大震災を迎えてしまった。釜石では千人の高齢者が亡くなった。そういう意味では取り組みは失敗だった。

研究者としての原点は。

大学（豊橋技術科学大）では過疎問題に取り組んだ。僕が岐阜の山間地出身ということもあったかもしれない。よく、畑仕事をしているおじいちゃん、おばあちゃんに話を聞いた。

震が関流に言うと、山間地には過疎問題がある。しかしみんな、「息子は来いと言ってくれるけど、俺は行きたくない」とうれしそうに話してくれた。おじいちゃんやおばあちゃんはここに住んでいて幸せなんだと感じた。そこに震が関とおじいちゃんの意識ギャップが存在する。

おじいちゃんにとっては幸せなんだから、山間地に住むのが合理的なこと。過疎問題の研究を通じて、ある人が行動を取るということは、その人にとってそれが是なんだと気付かされた。住民目線で物を考えたい。それが私の研究者としての原点になった。

防災への思いは。

人間は災害が起こった後のことを考えるのが苦手。防災は災害が起きたときに何も被害がなくて初めて「よかった」となる。なぜ防災が進まないのか。

地域づくりには攻撃と守りがある。都市計画を描く、建物を建てる、事業を進める。みんなそういう攻撃をやりたい。華々しいし、点数になるから。

ところが防災は一生懸命やって、効果は何も起こらないという結果だ。何も起こらないことで誰も喜んでくれない。当たり前だから。だから進まない。そんな中で毎回災害で多くの人が死んでいく。

災害で誰が一番悔しい思いをするのか。それは亡くなった人。生き残った人に精いっぱいの支援をすることは大切だが、僕は災害ごとき人が死なない社会をつくることが防災で最も大切だと信じている。

自分の命を行政など誰かに守ってもらおうと甘えているから、不平を口にする。他人に命を預けるのではなく、あなたがどう備えたかが問題なんだ。どんなこともあり得るのを前提に、精いっぱいの備えをしなければならない。

あなたに伝えたい

逃げないのにはその人なりの理由があり、それぞれが合理的な行動を取っている。

インタビューを終えて

「逃げない住民の目線から考え始める」。それが片田さんの防災の原点だ。底流に流れているのは少年期を過ごした古里、岐阜県旧加子母村の自然豊かな山や川で遊んだ体験だった。

「周りの人たちはみんな仲がよくて、どこのおじちゃんもおばちゃんも自分の親みたいだった。心地よく、幸せだった」と振り返る。そんな環境が片田さんに人の心に目を向けさせた。

考えてみれば、津波や地震、水害、土砂崩れから逃げるのも人なら、被災するのも人。人の心を理解しなければ、防災など成り立つはずもないことを、あらためて感じさせられた。